兵庫県現代詩協会　会報５０号

２０２１年１２月１日　発行：時里二郎

ふれあいの祭典
詩のフェスタひょうご２０２１」報告
～コロナ禍の中無事開催を終えて

十月一日コロナ感染拡大緊急事態宣言解除後の三日目予定通り十月三日（日）午後一時半より四時半まで神戸市教育会館大ホールで「詩のフェスタひょうご」を無事開催する運びとなった。

詩のフェスタひょうご

第一部　講演会　講師　高階杞一氏

最初に会長時里二郎より「紆余曲折を経てここに皆様と共に一堂に会することができたのは一重にみなさまのご協力の賜物と深く感謝申しあげ、これからの講師のご講演と詩の朗読を共に楽しみましょう。」と挨拶がある。

まだコロナ禍にあり、二百人収容のホールに百席を用意したが、申込者９０名中７０名前後の参加者を得た。マスク着用・検温・消毒のコロナ対策を行い、漸く開幕した。

第一部の講演「詩とは何か」は講師高階杞一氏のパフォーマンス、ギターを奏でながら「戦争は知らない」を歌うから始まった。これも「戦争を知らない子供たち」のザ・フォ・クルセダーズの歌とは初めて知った。

そして「詩とは何か」の本質に話の核心が迫ってくる。詩は散文と違い日常生活からイメージを起こして「発見と飛躍」をすることで展開していくことだと実例を挙げながら語る。その優しい語り口に会衆は聞き耳をたて手元の資料をめくりながら熱心にメモをとる。秋の日差しが降り注ぐ午後の豊かな時間が流れた。

司会は福田知子で後の質疑応答も時間の許す限り続いた。H氏賞受賞の詩集『キリンの洗濯』は今も新しい。

総会予告　総会は２０２２年５月１５日（日）１３時より　ラッセホールで開催される予定です。

第二部　自作詩朗読会

事前に募集した自作詩を十一名が発表。十三名予定が二名欠席で急遽『２０２０ひょうご現代詩集』より自作詩朗読に会員二名が加わって十三名になった。司会は高谷和幸でテンポよく進行。個性豊かな朗読がホール内を満たした。コロナ禍と学校行事のため高校生の応募者がなかったのは残念だが、その上休憩を挟んだせいか聴衆も減っているのが気になった。引き留めるのに何が足りないのか、今後の課題としたい。

＊自作詩朗読者　阿部由子・入間しゅか・岸本嘉名男
木村綾香・高木朝雄・田中信爾・濱田多代子・福田知子
藤井雅人・藤本紘士・安森ソノ子・黒田ナオ・福永祥子

＊終了後のアンケートより

質問１　イベントの感想　①大変良かった（５７％）②良かった（３０％）③普通（１０％）④良くなかった（３％）

質問２　良かった理由　①期待通り（３０％）②今後に役立つ（４６％）③わかりやすい（１９％）

感想　自由回答

・講演の内容が分かりやすい。（多数）
・丁寧な話しぶりで誠実さが感じられ詩人の肉声が聞けて良かった。
・充実したイベントで心に伝わった。
・詩の本質的な意味を作品を挙げながら話をしていて大変分かりやすかった。
・コロナ禍でも実施できて良かった。
・空調の音が気になった
・エレベータ前の受付が密になった
・クーラーが寒かったが、調整してくれたのでよかった。
・朗読会を先にしてほしい。

貴重なご意見ありがとうございました。今後の参考にさせていただきます。

（報告　山本眞弓）

■高階杞一氏の講演「詩とは何か」に参加して

開口一番、高階杞一氏はギター一本しかも生音で「戦争は知らない」（作詞　寺山修司）を沁みとおるような歌声で唄ってくださった。七十名前後はいただろうか、参加者たちの心がスーと一つにとけ込む瞬間だった。

高階氏は終始穏やかな口調で淡々と語ってくださる。それでいて「ポツン、ポツン」と何か一心にきいている私達の心の深い処に灯りがともされていくようだった。

詩を書くきっかけは『三好達治』の詩に影響を受けたことなど率直におっしゃった。嬉しかった。私も「太郎を眠らせ」のあの二行詩が大好きで今でも諳んじると涙が出てしまう。

さて、本日の演題は「詩とは何か」――一瞬の間があってかれははっきりとした口調で「詩とは一言でいえば『発見と飛躍』です」と。それから一人一人の心をゆっくり解きほぐすように、事前に配布されたテキストに添って話を進めていかれた。

これは詩だと念いますか　改編

今朝ぼくは
いつもより早く
起きて
学校へ
行きました

今朝ぼくは
いつもより早く
起きて
ぼくに
会いました

八時前に
学校に着きました

二十年前の
ぼくに会いました

こうして当日のテキストを書き写してみると、「詩とは何か」「えっ何だろう?そういえば何となく詩のようなものを書いてはきたが・・・・」と自問自答している私と出会う。でもそれ以上、私はこの二編、改編とを読み比べながら、高階氏からは「ひとつの答え」以上に大きな「発見」を頂いたような気がした。まさしく詩という言葉の領域を越えて高階氏の肉声と直に向き合っていると「詩の本質論」よりも深い実感を味わうことができた

「詩を書き続けるための何かヒントのようなものが教えて頂けるかしら?」と参加したけれど、そんな表層的な思考吹っ飛んでしまった。

当日、参加者に配ってくださってテキストの詩を一編一編優しい声で読まれながら、一つの言葉に宿るなんとも優しい風景が目の辺りに浮かんでくる。

「雨になる」たちあがっても雨　ねころんでも雨
「雨」　どんなにいっぱいの悲しみが　君を降らせているのか

「茫洋」　ハサミで夜を切っていく　菱形、三角、ギザギザ、むちゃくちゃそんなふうに　ぼくらも教わった

資料から私が無性に惹かれた高階氏の詩のフレーズを書き出してみた。こうして何度も読み返してみると「詩とは何か」の問いに私自身は明快に答えられないが、やはり心の深い処にポツンと灯りがともされる。

空への質問　ここに今ぼくのいる意味は
ここへ　ぼくを呼んだのは　なんですか
なぜですか

この広い宇宙の中で
ここに今　ぼくのいるのは　ぼくは
なぜですか　なんですか

なんだろう

《高階杞一詩集　空への質問》より　（報告　福永祥子）

■第２０回読書会
『高階杞一の作品について』

８月１日（日）１３時　神戸市教育会館４０４号室
チューター　神尾和寿　報告　黒田ナオ
参加２７名　（担当　丸田礼子）

空飛ぶキリンの眼差し

高階杞一さんの詩は春のモンシロチョウみたいだな、て思っていました。軽やかで可愛くて、ひょいと簡単に手で捕まえられそうな気がするのですが、実際に捕まえようとすると、すうっと指の隙間からすり抜けてしまって、気配だけは残されているものの、なかなか上手く捉えることが出来ないのです。

そこがまた、高階さんの詩の魅力でもあり、わかりやすい口語で書かれていることが多いので、すぐに理解してしまえそうな気になるのですが、わかっているようで、なんだか少し訳がわからない。でももちろん、心の奥には、しっかりと何かの気配が残されています。

そんな謎めいた高階さんの詩を、高階杞一さんとは長いお付き合いのある神尾和寿さんが、解説してくださるということで、楽しみに出かけて行きました。

高階さんといえば、わたしは詩集を何冊か読ませていただいたものの、ご病気で幼いお子さんを亡くされた、ということしかよく知らなかったのですが、神尾さんが年譜をもとに時間の経過に沿って説明してくださったので、それぞれの詩集が、高階さんのどのような気持ちの中で書かれたのかがよくわかりました。

高階さんが大学では農学部で勉強されていたこと、また日本万国博覧会記念協会で造園技師として働いておられたことなど、全く知らなかったので、びっくりしました。造園と詩を書くこと、なんだか面白い組み合わせだなあと思いました。全く違う世界のようでいて、なんだかちょっと共通している部分もあるような気がします。もしかしたら庭を造るような感じで、詩集も編集されているのでしょうか。

「キリンの洗濯」という詩の最後の部分で、「窓から／洗いたての首を突き出して／じっと／遠い所を見ているキリンが見える」というところなんてまるで、造園技師がどこか少し離れた場所から俯瞰して、自分の詩を見ながら書かれているような気がしました。そして、高階さん自

身もキリンのように長い首を傾げながら、「あれっ、どうして僕はこんなところにいるんだろう」と、ぽかんとしているみたいな気がして、読んでる私も、ふふふっと笑ってしまいます。

神尾さんの解説によると、高階さんの詩が多数の読者を獲得される理由のひとつとして、独りよがりにならない客観的視座、素直さ、開放性にある、ということでしたが、それこそが造園技師の俯瞰した目線にあるのかもしれないと思いました。

高階さんは、詩の推敲をかなり何度もされると聞いたことがあるのですが、それも植木の枝の剪定作業のようなものかもしれません。そうやって巧みに剪定された詩の言葉たちは、ユーモアがあり、それも適度に刈り込まれているため、モンシロチョウのように軽くひらひらと、読む人の心の中で自由に飛びまわっています。

神尾さんの言葉によると、高階さんは「いつも型にはまらず、新しい可能性を考えて、新しい詩をつくり、詩集をつくる」ということです。造園技師の仕事から、ご自分で出版社を作られ、大学の講師をされるなど、次々と新しい世界に挑戦される高階さんの詩には、神尾さんの解説によると「当たり前となっている日常生活が実は不思議である『深淵にさらされている』ことに目覚め、さらに、その衝撃をいかに展開していくか」という思いが表現されているそうです。

そんな高階さんは演劇の脚本を書かれたり、四元康祐さんの写真とコラボして詩集を作られたり、松下育夫さんとの共著の詩集を出されたりと、ますますいろいろなことに挑戦されているように思います。そこのところについては十月にある講演会で高階杞一さん自身の言葉として、さらに詳しく聞かせていただきたいと思いました。

神尾さんのお友達ならではのユーモアたっぷりなお話はとても楽しかったです。どうも有難うございました。

第８回　2021 年度文学紀行

《第８回文学紀行　播磨の小京都龍野の町ぶらり歩き》

2022 年 3 月 13 日(日)雨天決行

集合　JR 姫新線本竜野駅改札　9 時 30 分

(参考)　JR 神戸線新快速・三ノ宮駅 8:08 発⇒姫路駅 8:49 着・姫新線乗換 9:08 発⇒本竜野 9:28 着

参加費　3,000 円（昼食代・観覧料含む）

※行程※　9:30ＪＲ姫新線本竜野駅集合⇒15 分程度徒歩にて旧龍野地区へ、この地区の一部が国の「重要伝統的建造物群保存地区(重伝建地区)」に選定⇒散策で龍野歴史文化資料館、醤油の郷大正ロマン館、うすくち龍野醤油資料館、如来寺、霞城館・矢野勘治記念館、赤とんぼ歌碑巡りなど

⇒13:00 山菜料理　すくね茶屋にて昼食

申込は同封葉書でお願いします。締切 2 月 28 日(月)　（担当・大西隆志）

第 11 回　*Poem ＆ Art Collection*

2022 年 1 月 13 日（木）10 時～18 日（火）15 時　期間中　平日：10 時～17 時　土・日：９時～17 時

会場　神戸文学館　〒657-0838　神戸市灘区王子町３－１－２　℡＆Fax　078-882-2028

主催　兵庫県現代詩協会　神戸文学館、後援　日本現代詩人会・半どんの会

☆ポエム＆アートコレクション　会員による詩・アート作品　（絵画、書、オブジェなどの展示）

◇搬入・展示作業　1 月 11 日（火）１3 時集合　（宅急便による搬入は要相談）13 時半より作品展示作業開始

◇搬出　1 月 18 日（火）15 時（時間厳守）から 15 時半。上記の時間内に各自作品をお引き取りください。

（宅急便による搬出は要相談。会期中及び搬出時間前の作品の引き取りは不可）

◇参加費　１点￥500（2 点まで可）搬入時に納入

◇出品作品は額装・パネル・表具など大小を問わず１点として計上します。作品に添えられる詩は A4 サイズくらいの大きさでまとめてください。過去に当会の詩画展に出された作品の再出品は不可

◇**講演会：演題「詩を書くということ　第三回」　講師　時里二郎**　1 月 15 日(土)14 時～15 時半　詩の言葉、詩の表現について考えます。資料としては神戸新聞の投稿欄の作品や活躍中の詩人の作品などを取り上げる。

＊**講演会に参加ご希望の方は神戸文学館に事前に直接申し込んで下さい。**

☆**「詩の現在展」**（会員の詩集、詩誌展示）本年も優れた詩集、詩誌を展示します。（担当：福永祥子・野口幸雄）

■会員の詩集評　時里二郎

◎**和比古**さんの「モザイクの空」（土曜日美術社出版販売）は第８詩集。あとがきに「名画に魅了された心象風景」とあるように、和比古さんがひかれた絵をもとに言葉を紡いでいる。ただし、それぞれの作品が何という絵を対象としているのかは明記されていない。有名なモチーフであれば、それなりに見当を付けることができるが、それがわからない場合、気になってしまう作品もある。むろん、読みどころは心象風景としての詩である。なかなか絵を見て詩を書くというのは至難。絵は言葉で描けないものを表現しているのだから。従って、絵を明記していないのは正しい態度で、それだけ詩（言葉）に集中できる。対話している作品がやはり読み応えがある。言葉が絵と向き合い、言葉のほうがおのずと動いていくのが感じられるとき、詩が生まれる。「額縁から出るのはいつだ」を引く。「太く黒い線で／縁どられた道化師の顔／じっとこちらを見ている／顔には深いしわがある／厳しい年月を過ごしたのであろう／厚塗りされた絵具は年輪／もう世の中にはいたくないのか／表情も変えず／全く動かない／道化師として活躍しなければと思う／やさしいこころを拡げたい／そんな世界になることを望んでいる／額縁から出るのはいつだ／哀しい祈りが／外から聞こえてくる」。（６月刊）

◎**黒田ナオ**さんの「ぽとんぽとーんと音がする」（土曜美術社出版販売）は、第３詩集。本詩集所収の「水かさの増した川の流れを」で、第２８回詩と思想新人賞を受賞なさった。その受賞特典として発刊されたのがこの詩集。受賞作では「気がつくと／幽霊が見えるようになっていた」と始まる。それもあんまり恐くない幽霊。「ちょっと悲しそうな顔をして」。幽霊はどこにもいて、ふつうの人間と大きくは変わらない。やがて後半でわたしは幽霊になっている。他の作品では、「ただ一本の高い煙突となって／ぽーぽーと情念を／湧き上がらせている」（「煙」）とか、ぽとりぽとりとわたしがバナナになって空から落ちてくる（「バナナ日和」）など、異界や異次元と自在に往還したり、変身したりする作が多い。それもエピソードが意表をついていて、ナンセンスで、とぼけたようなオノマトペを多用したり、無頓着で軽い言葉遣いも特徴。異界や異次元に自分や世界をずらしてみることで、未知な自分や隠れていた世界が見えてくるのを面白がっているような印象。好詩集である。さきほどの「バナナ日和」の後半部。「ぽとりぽとりと／わたしが落ちる／空っぽの／青い空から落ちてくる／何人　何人　何十人／／ゆっくり空から落ちてきて／だんだんわたしが／遠くなる」。（６月刊）

◎**牧田榮子**さんの「わたしの絵本ノート」（澪標）は、絵本についてのエッセイ集。「こどもたちと読みあった絵本」、２８冊が紹介されている。なによりも、導入のエピソードや話題が実に面白くて、知らぬまに絵本の世界に入り込んでいる。例えば「ぞうのボタン」では、困難な釦はめの話題から入る。ある日、年少のクラスの保育室で、連日パジャマの上衣の釦と格闘している子が、とうとうひとりでできた。「その瞬間「パパあ　できたよお／そこにはいない父親に向かって大声で叫んだ。／このひとことにこどもの不屈の努力と父親の日ごろの応援ぶりが覗える。」子どもの一言に、その子の日常をぱっと、しかも温かい眼差しですくい取るところ。彼女のそのような視線がそれぞれの絵本の魅力を具体的に引き出し、実に丁寧に差し出されている。たんなる絵本の紹介ではない。滋味のある文章と、批評力、それに何よりも絵本への愛着の深さを感じさせる一冊。（６月刊）

◎**今村欣史**さんの「縁起　小墓圓満地蔵尊」（小墓圓満地蔵尊奉賛会）は、今村さんのお住まいの近く（西宮市用海町）にある地蔵尊の縁起をまとめたもの。いわゆる地域の地蔵さんで、今なお地蔵盆が催されているという。その縁起も興味深いもので、なんと、京都のあの百万遍知恩寺から西宮の当地に運ばれたものらしい。その由来や、それらにまつわる様々な話など、郷土史的な興味も含めて貴重な労作である。コロナ禍の世情が、地蔵信仰とも結びついているような感じ。疫病や天変地異、飢饉などの災厄によって犠牲になった子どもたちや人々の供養の思いが、地蔵尊にはことのほか深く籠められている。今村さんの今回の縁起出版の思いは、そんな所にも及んでいるに違いない。（８月刊）

◎**森田美千代**さんの「片道切符の季節（めらんこりあ）」（澪標）は第２詩集。前詩集よりもさらに抒情に深みが増している。やはり故郷山形が、森田さんの詩の根にある。それは望郷の念というよりももっと切実で、今なお過疎の故郷に心を置いて、今の視座で故郷を見つめようとしている。そのせいで、おのずと社会的な問題意識や疑問や、それまでの自らの悔恨さえ含んで、抒情の深みというのは、おそらくそのような複雑で重層的な視点が生んだものだと思われる、また、そこには通奏低音のように、自然や季節への眼差しが織り込まれているのもこの詩集の魅力のひとつだろう。冒頭の「朽ちる影」からその一部を。「ひたすら空を見上げて呼びかけてみる／非情な空のむこうの／朽ちる影こびりつく／日暮れていく空／ぽっかり開いて／ぐるぐる渦巻く／終わりがみえない／／言葉を紡ごうと／思考のかげろう／小刻みに溶けていく／うろたえる雲となって／／葉裏をゆらして飛び立つ追憶／のどの奥からこみあがる小さな叫び／日々ながれ／匂いかすかに／季節が停滞して遠く　近く　揺れてはもどる／追いつかない／指先をちょん」彼女の詩作の様子がよくうかがえる。（９月刊）

◎**山本眞弓**さんの「ティータイム」（澪標）は第３詩集。後書きによれば、前詩集「五月の食卓」でアフリカの詩１０編を載せたところ、続きを書いて欲しいという要望もあって、「胸にアフリカの日が消えない内に、新しく２０編を書き下ろすこと」にしたとある。２０年前に日本語を教えるボランティアとして３年間ケニアのナイロビに滞在したときのことを回想して書かれている。日本から遠く離れた異郷でのとまどい、民族性の違い、風土と自然、

動物などが取り上げられている。決して快適とは言えない、しかも風習も何もかもが異なる土地での困難やとまどいが描かれているが、不思議とその言葉のトーンは明るく、自然に軽やかな心のリズムさえ感じられるところが魅力だ。なによりも底に流れているのは生きることの自然な肯定の姿勢。民族性も風習の違いもそのまま受け容れていこうとするところ。ただ、２０年の時間の経過がほとんど作品に感じられないところが気になった。２０年という時間が作品に描ければもっと深みのある詩集になったのではないか。もうひとつこの詩集の魅力は滞在当時に書かれた「ナイロビ通信」（№１から１７）が巻末に付されていること。これがとても貴重で面白い。（９月刊）

■春名純子さん追悼　中堂けいこ

最後の電話は三冊目の詩集出版の話でした。そしてそのまま互いの都合でとだえてしまいました。親子ほどの年の差を越え、貴姉は常に詩の友人でした。と、過去形で書かねばならないのはさみしいかぎりです。

貴姉は若き日に、港野喜代子さんの薫陶をうけられ、後に灌木の高橋徹さん、貞久秀紀さんに師事。早くに詩学の新人に選ばれ、詩集『風屋』『猫座まで』を上梓。現代詩神戸の同人でした。

「私は詩のことばと共にある。」と、一行からの詩句を胸にだきしめ、愛について生死について、記憶の風景をひたすらことばにのせる、その詩の紡ぎ方を独自の表現方法で獲得されました。豊穣な詩世界への憧れと情熱を持ち続けた詩人春名純子さん。どうか安らかにおやすみください。

飛べ　御影石の船　マンタのように
舳先には十字の紋章をかざして
『風屋』　海のレクイエム　部分

■常任理事会報告

第１回常任理事会
６月６日（日）１３時～　県民会館　出席者１１名
＊新体制４役決定報告　＊２０２０年度総会　書類総会の結果。返信数１０１通。会員数の過半数で成立。全ての議題承認。**＊新役員の役割分担**を決めた**＊退会**３名　現在会員数１２６名**＊名簿発行**６月末＊退会届は今後、文書で行う。規定の退会届葉書版を作成する**＊４月会計報告**・２０２０年度年会費未納者３名。今回アンソロジー決算は予算を下まわったので、余剰金は次回アンソロジー発行費用に充てる。**＊会報４９号**　発行・７月１日　発送・６月２９日　会報５０号記念で、これまでの会報を纏める。担当大橋愛由等。**＊読書会**　第２０回読書会「高階杞一の詩について」チューター神尾和寿　８月１日（日）申込葉書（会報に同封）４９号会報に案内**＊ポエム＆アートコレクション（第１１回）**会場：神戸文学館　＊特別イベント　講演　時里二郎　案内文と申込葉書は会報とは別便で送付**＊文学紀行**　開催日時：２０２２年３月頃行き先：候補として伊丹・龍野**＊ホームページ**　英語版について検討。

第２回常任理事会
７月１０日（土）１３時～　県民会館　出席者１２名
＊入退会・入会者１名。現在会員数１２７名　今後、入会申込書にメールアドレスを記入。退会届のハガキを作成。この葉書で退会届。（逝去の場合、不要）**＊会計**　６月会計報告**＊会報**４９号７月１日発行・発送６月２９日**＊第２０回読書会**　現在申込数１５名**＊ホームページ**　会員が関わるイベントは詩に関係すること以外でも、情報を北野常任理事に送る。**＊第１１回ポエム＆アート**　日程と特別イベントについて決定**＊文学紀行**　実施日２０２２年３月１３日（日）　場所：龍野。行程詳細は後に提案。**＊詩のフェスタひょうご**　役割分担の案を検討。７月６日チラシの発送終了。**＊その他**　会則の変更について　非常時に於ける総会・理事会の運営・事業の開催についての判断及び対処の仕方を付加する提案を検討。規約に書き込む方向で、継続討議する。

第３回常任理事会
９月１９日（日）１３時～　県民会館出席者１１名
＊入会希望　１名　入会申込葉書は未着。**＊会計**　７月・８月会計報告**＊第１１回ポエム＆アートコレクション展**　要項・出品申込はがき（締切９／３０）発送８月２３日。５０号会報と同封して発送。参加者　現在８名。会報５０号に記事。**＊読書会**　第２０回参加者２７名　第２１回読書会１１月２７日（土）杉山平一の詩について　チューター　今村欣史会員　場所　神戸市教育会館５０１号室　１３時より　**＊会報**　５０号記念として「会報アーカイブ」は、４頁に収める**＊文学紀行**　詳細は会報５０号に記載**＊その他**・非常時の場合の判断と対処法を規約に付記することとした。文言は次回常任理事会で検討する。・関西詩人協会との交流会を来年度のイベントとして採り上げる。実施は７月か８月。（報告　神田さよ）

■詩のフェスタひょうご会員朗読詩より抜粋

部屋　阿部由子（Ⅰ、Ⅱのうち Ⅰのみ掲載）

ひとりは背が高くて　青い髪
ひとりは中背で　青い瞳
こんなふたりが
細長い部屋にひとつ置かれた
小さなテーブルにむかいあう
お久しぶり
ほんとに

あえてうれしいわ
わたしも
飾り窓にはサフランの大きな鉢がひとつ
淡い日差しを薄紫に染めている
ふたりが出会ったのは十年前
同じ部屋の同じテーブルで
それから
立ち止まることもなく
振り返ることもなく
伸びてゆく　意識に
記憶の断片が融けるのにまかせてきた
心は　遠いところに置いてきた
昏い森の中だったかしら

雷雨が横なぐりにほとばしり
樫の枝が大きく揺れ
風鳴りが中空を切り裂いた

越境＊送り火　福田知子

どんどん急上昇する気温
キーボードまで侵食している
生命を脅かす高温
風鈴は熱風をうけ　今にも割れそうだ
ベランダの植物たちは自ら緑を溶かし
熱を跳ね返す
窓際の左腕もジリジリ焦げ・・・
今日は五山の送り火
京都の友人とＳＮＳで会話を交わす
　京都　３８℃　神戸　３３℃
強い影に浮かび上がる街を見ている　一六階から
丘陵の街　光の向こう　遠くに海が霞んでいる
いまはなにも考えずにあそこまでいこ
けれど　脱出できない
柵に阻まれ
あるく
バスに乗る
地下鉄に乗る　レールで乗り越えて
山の向こうの街へ――
けれど　柵を越える乗物(ビーグル)はない
コロナ感染拡大予防のため　越境はひかえてくださ
い・・・
送り火も決定にあらがえない
ソーシャル・ディスタンスをとった「大」の文字が大きく
欠けて
山々の月齢が欠けて――
明日にむかって
わたしたちはどこまで越境できるのか

Ｆ君のこと　田中信爾

（三編のうち一編のみ掲載）

Ｆ君という友人がいた
最初は私の下宿へ来た
突然彼は来た
下宿を変えると
彼はまた来た
そんな事の繰り返しで
彼も私も職業人となった
それなら
彼は私を利用しただけなのだろうか
彼が私の教えてくれたもの
それも少しはあったと思う
彼はもうこの世にいないけれど
もう一度会って
「君は僕のことどう思っている」
と聞いてみたい。

メダカ　濱田多代子

あんたええ時来たな
ついとるで
広場にひとまばら
午後五時
もうお終いのイベント
メダカの日の旗の前で
水槽に目を移すと
すかさず声がした
大サービスや
このメダカ持ってかえりな
面白い顔しとるやろ
楊貴妃　だるま　出目
全部まとめて名前や
楊貴妃は緋の色
だるまは太っちょ腹
出目は両方に目が突き出とるやろ
な　買いな
ほんまは五千円もするで
えーい
負けて千円や
楊貴妃　だるま　出目
まとめて名前
名前負けしそうな
メダカ夫婦を買う
カルキを抜いた水を張る
雌のメダカは腹を振り振り
ちょっと細めの雄メダカを追いかける
雄メダカに問いかける

おーい
お前の家は恐妻家か
雄メダカは逃げ回る
ひたすら逃げ回
毎日　毎日
逃げ回る
仲良くしろよな

五日目
水面に
腹を上にして
雄メダカ昇天
アーメン
ソーメン
タコスイモン
合掌

楊貴妃　だるま　出目
まとめて名前
雌メダカ一匹
広い水槽の中
太っちょ腹に
小さな尾びれ
フルフルフリと泳いでいる

お前
この世界
全部自分のものにしたけれど
寂しくないかい
緋色の姿
一瞬停止

楊貴妃　だるま　出目
まとめて名前
雌メダカ一匹
いつも一匹

■他団体会報・詩書（２０２１年６～１１月）

すずかけ　６・７・８・９・１０・１１月号（兵庫県芸術文化協会）
群馬詩人クラブ会報　№３１７～３１９号（佐伯圭）
詩界通信　９５号（北岡淳子）
関西詩人協会会報　１０１・１０２・１０３号
詩のひろば　第１３号（関西詩人協会・左子真由美）
福岡県詩人会会報　№１８０号（脇川郁也）
大分県詩人協会会報　№１６０（井手口良一）
日本現代詩人会会報　№１６３・１６４（山田隆昭）
千葉県詩人クラブ会報　№２５４・２５５（根本明）
岡山県詩人協会だより　№３２・３３（中尾一郎）
日刊ミニコミ紙竜神（るい編集工房）
福井県詩人懇話会会報　１０５・１０６（渡辺本爾）
いちご通信　第３０号（大分県詩人連盟）
兵庫県歌人クラブ会報　第２０５号（安藤直彦）
石川詩人会会報　第５０号（米倉晋）
中日詩人会会報　№２０１・２０２（宇佐美孝二）
北海道詩人協会会報　№１５０（村田譲）
中四国詩人会ニューズレター　第５０号（川辺真）
埼玉詩人会会報　第９７号（川中子義勝）
福島県現代詩人会会報　第１２６号（齋藤貢）
茨城健詩人協会会報　№３２（高山利三郎）
宮崎県詩の会会報復刊　４８号（谷元益男）
木立ち　第１３９・１４０号（木立ちの会）
おたくさ詩と連句　Ⅳ－１（鈴木漠）
RIVIERE　１７７～１７９（横田英子）
Moderato　５２　エッセイ・詩（岡崎葉）
現代詩２０２１（日本現代詩人会）
栃木県現代詩年鑑２０２１（栃木県現代詩人会）
三重県詩人集ＶＯＬ・２９（三重県詩人クラブ）
岡山県詩集　２０２１・８（「岡山県詩人協会）
２０２１年刊詩集（徳島現代詩協会）
詩集ふくい２０２１（福井県詩人懇話会）
西宮文芸誌　表情　第３０号（西宮芸術文化協会）
全国川柳作家」年鑑　第６６号（ふあうすと川柳社）
しまね文芸フェスタ２０２１（島根文芸協会）
福井県ふるさと詩人クラブ会報　第１０号
呼吸 151 特集《遊》（現代京都詩和会）
いわての詩２０２１（岩手県詩人クラブ）
記憶の暦（原圭治）
鳥　８１号（元原孝司）

■会員の発行書（２０２１年６～１１月）

『モザイクの空』和比古（土曜美術社出版販売）
『蒼き旅』和比古（遊文舎）
『わたしの絵本ノート』牧田榮子（澪標）
『ぽとんぽとーんと音がする』黒田ナオ（土曜美術社出版販売）
『片道切符の季節（めらんこりあ）』森田美千代（澪標）
『テイータイム』山本眞弓（澪標）
『縁起　小墓圓満地蔵尊』今村欣史（小墓圓満地蔵尊奉賛会）

■会員の詩誌・個人誌（２０２１年６～１１月）

現代詩神戸　２７３・２７４（三宅武）
プラタナス　ＶＯＬ・６８（玉川侑香
鶴鴿　１６　（江口節）
まほろば　詩・エッセイ　第５１号（たかはらおさむ）
Contralto　№４４（坂東里美）
EDGING　４９・５０（寺田操）
遥４号　（和比古）
あむの木通信　第１４９-１５２号（福永祥子）
Ｏｃｔ　ＶＯＬ・１７（高谷和幸）
ア・テンポ　６０号（玉井洋子）
時刻表　１０号（たかとう匡子）

別嬢　１１４号（高橋夏男）
Mélange１６３～１６６（大橋愛
風の音　第２２号（野口幸雄）

■会員の動静

◇ロルカ祭　２０２１年８月２１日　カルメン、大橋愛由等、大西隆志。高谷和幸　など

◇姫路シンポジウム　「表現する若ものたち」
会場：姫路文学館講堂　２０２１年１１月７日(日)午後１時３０分〈「神戸詩人」事件〉から８０年＋１　問合　エクリの会　高谷和幸

◇芸術団体半どんの会文化賞受賞　神田さよ
表彰式　２０２１年１１月１４日

◇西宮芸術文化協会朗読会　２０２２年１月２２日１４時　西宮市民会館大会議室　芦田はるみ、今村欣史、和比古、香山雅代、神田さよ、佐伯圭子、佐野博美、望月逸子、山下輝代、高校生の詩朗読。

■逝去

春名純子

■新入会員

後藤益男

福永祥子氏に師事。本協会で足跡を残したい。「のじぎく文芸」詩部門最優秀賞受賞。明石市勤労福祉会館作品展　〒665-0049 神戸市垂水区狩口台1-C7-304 ℡ 090-1968-1552

青春のリバーブ　後藤益男

午後の授業は睡魔との戦い
君は隣の教室
確か数学の授業だったけ
「英語と数学は真面目にやっているよ」
「それなら僕は美術と国語だよ」
共に過ごした　アオ　ハル
共に過ごした　三年間
夏は汗を流そうぜ
気障なセリフが似合っていた
秋は音符を空に飛ばそうぜ
軽いセリフに酔っていた
冬の冷たい風に涙を流して
空をつかみ取ろうとした
三回の夏
三回の秋
三回の冬　繰り返す
無理をチカラずくで押し通す
春　夏　秋　冬　完全走破
桜に気付かされた戻らない日々
春は全部連れ去ってしまう
いつの日か全部消え去ってしまう
夢はいつもリバース
思い出は全部　リバーブ
青春のリバーブ

■新入会員をご紹介ください

《兵庫県現代詩協会》は詩に関する幅広い行動を行っており、**読書会、詩画展**や**文学紀行**などお互いの交流を図っています。詩を愛する集いの場として、新たなつながりに参加希望の方を求めています。ホームページをご覧下さい。問い合わせや入会希望の方は事務局にご連絡下さい。

■事務局より

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

◎発行所　兵庫県現代詩協会
〒651-0091 神戸市中央区若菜通6-4-15-203
山本眞弓方　℡ ０７８-２４１-３０８６

◎事務局　会員発行の著書・詩誌などの出版物は事務局へお送り下さい。詩に関するイベント情報の案内、会員の動静もお知らせください。《山本眞弓》℡ ０７８-２４１-３０８６

◎ホームページ　当協会ホームページには、協会主催の行事や会員からのイベント等の情報を掲載しております。また会員各位からの情報提供、寄稿をお待ちしております。「兵庫県現代詩協会」で検索して下さい。
URL: http://hyogopoetstry.sakura.ne.jp/main/
《北野和博》　soranohito.jp@yahoo.co.jp)

◎会計《玉川侑香》℡ ０７８-３６１-１３３４　今年度の会費は会員皆様のご協力により円滑に納入されています。有難うございます。未納の方は恐れ入りますが、納入方よろしくお願い致します。
年会費は四千円　　口座名　兵庫県現代詩協会
振替口座　００９２０・９・１１１２４３

◎会報編集《和比古》℡ ０７９８-７２-９３０８
《高谷和幸》℡ ０７９-４４７-３６５２

◎印刷《遊文舎》〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-17-31　℡ ０６-６３０４-９３２５

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

会報５０号発行を記念して会報１～５０号のバックナンバーをまとめたリストを会報５１号発送時に別冊として配布予定です。お楽しみにお待ちください。